AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会・会報　第 20 号

空中回廊

この企画展はみどころ満載［自然をめぐる千年の旅ー山水から風景へー］／会員のひろば／愛知県美術館コレクションから ー深く知ると、もっと見えてくる［与謝蕪村２作品］／講座ダイジェスト／友の会活動紹介／事務局だより

重文　与謝蕪村《富嶽列松図》(部分) 江戸時代

○この企画展はみどころ満載○

自然をめぐる千年の旅―山水から風景へ―

3月11日(金)から5月8日(日)まで開催

美しいものへの気持ち

日本人が千年の間に自然に対して抱いてきた思いに変わりがあったでしょうか？奥深い山に分け入るときその神秘を畏れたり、四季の移ろいに心動かされたり、生き物の不思議に見入ったりといった本質的なことは何ら変わりがないのです。しかし、千年前と現在では自然の有り様は変ってしまいました。2005年愛・地球博では「自然の叡智」がメインテーマとなり、その万博に合わせて開催される今回の展覧会では「日本人と自然の関わり」がテーマになっています。今一度、自然について深く想いを巡らせる良い機会となると同時に、いろいろな視点から自然を表現した美術を楽しむことができるみどころ満載の展示内容です。

展覧会の副題は「山水から風景へ」とつけられていますが、山水と風景の違いには諸説あるようです。一つには、山水は架空の場所や中国などを描いたものであるのに対し、風景は実際の場所を写生したものだという説。写生というのが近代以降、西洋から入った技法でありながら実際にはより日本的な光景が描かれるようになったのは興味深いことです。

絵巻物の楽しみ

今回は巻物の作品が何点も展示されます。絵巻物は右から左へと物語が進んでいき、巻物を一面ずつ広げたときに次の面の展開が楽しみをそそるようになっています。時には次の面の物語が左から右に流れとは逆に展開している部分も見られ、読み手の意表を突くというような趣向が凝らしてある場合もあります。平安後期に描かれた日本絵画史を代表する傑作である《信貴山縁起絵巻》もそうした巻物のひとつです。10世紀の初め信貴山(奈良県生駒郡)に篭り、奇跡を行った修行僧命蓮の物語を三巻に描いたもので、第一巻の「山崎長者の巻」は、空を飛ぶ鉢が長者の米倉を信貴山上に運んだ後、命蓮の法力で米倉の中の米

国宝《信貴山縁起絵巻 山崎長者の巻》(部分)平安時代

俵だけが長者の邸に戻ったという話ですが、巻末では長者の邸の左側から米俵が帰ってきます。一巻の絵物語を手にとり、少しずつ広げながら読んでいく巻物の扱いは現代ではほとんどなくなっていますが、昔の人が絵巻物を読み進めている様子を想像しながら展示を鑑賞すると、作品の絵柄を見ること以上の楽しみが広がることでしょう。

《行く春》に想うこと

奥多摩の自然をこよなく愛した川合玉堂は、数多くの写生をした人でもあります。それらを生かして優れた日本の風景を描きました。《行く春》もその中の一点です。この作品の「行く」という言葉の意味には、移り行く季節という意味と散った桜の花びらが風に運ばれて行くという意味、川の水が流れて行くという意味があり、3つの速さが異なっている点がこの作品の奥行きをより深くしています。また、玉堂が屏風を立てた状態で描いているので花びらの絵具が下にぽってりとした感じに出ている点もよくご覧ください。左隻には縄らしきものを編んでいる男の人の姿が描かれています。彼の周りにはこの上なく美しい春の景色がありますが、それには目もくれず一心に仕事の手を動かしています。しかし、彼がふと仕事の手を休め周りの景色に目を止めたときにはひととき仕事の疲れが癒され、一日の仕事を終えて家路につくときには傍らにある晩春の風情が緊張していた心を和ませてくれたはずです。彼の姿は現代に生きている私たちの姿にも通じるものがあるように思えてなりません。日々の生活の中で自然がどれほど大きな役割を果たしてくれているかということにあまりにも無関心でいて、それが当たり前になっています。それこそが「自然」が自然である所以なのでしょう。かつて川合玉堂展を担当され、今回の展覧会も担当される深山学芸員は「周りの美しい風景に無関心な人が描かれているところが、鑑賞者を自然に対して無関心ではいられなくする効果がある。来年の春も迎えられるだろうか？という無常観も起こさせる。自然は誰も見ていなくても美しいものなんですよ。」とお話くださいました。

日本を紹介する作品たち

この展覧会には海外からも多くの来館者が予想され、駅などのポスターが各国語で表記されているのを目にされた方も多いことでしょう。初めて日本の美術に触れる外国の鑑賞者にも作品を身近に感じてもらえるよう、国宝・重文65件をはじめ日本美術を代表する名品約160件を年代別に展示するのではなく、五章に分けて意味を持った展示の準備をされている担当学芸員の皆さんのご苦労が偲ばれます。浮世絵ひとつを例にとってもより良い摺りのものを展示するために、1点1点吟味してわざわざ異なる所有者から借りているそうです。また、外部への貸し出しが大変稀な貴重な作品も多数あります。質量ともに優れた展覧会を是非、一人でも多くの方、特に遠方から万博に来られる方にも紹介していただき、会員の皆さんも何度もご覧ください。　（折戸）

重文 川合玉堂《行く春》大正時代

○会員のひろば○

10周年記念パーティー 美術館サポート活動

◎友の会 10 周年記念パーティー開催

昨年 12 月 4 日に、友の会 10 周年を記念するパーティーが開催されました。浅野初代館長、長谷川前館長にも遠方から駆けつけていただき、100 名という参加者の多さが友の会の発展を裏付ける良き会となりました。さて、この会の裏で、本編集部は参加して下さった皆さんへのインタビューを決行。結果、とてもおもしろい意見を聞くことができましたのでご紹介します。

～　～　～

Q：学芸員さんへのあなたの印象は？

- **市川館長**…哲学者のよう。手抜きがない。
- **木本企画普及課長**…優しい。テレビでよく見かける。
- **村田美術課長**…声がいい。話上手で狙いがよく伝わる。
- **村上学芸員**…話が整理されていて作品が理解しやすい。
- **拝戸学芸員**…雰囲気が非学芸員的。真摯な態度。
- **深山学芸員**…シャイだが内面の深さを感じる。目が 20 代の頃のリキテンシュタインに似ている。
- **馬渕学芸員**…話し方が理知的。可愛らしい中に情熱を持っている。

他にも魅力的な方ばかりです。イベントにどんどん参加して学芸員さんとも交流を深めて下さい。

Q：最近印象に残った美術館は？

[**金沢 21 世紀美術館**] よかった！ (2004 年 10 月開館)

[**国立国際美術館**] マルセル・デュシャンと 20 世紀美術展を見て表現は自由だと感じたら肩の荷が下りた。

[**徳川美術館**] 大名生活の雰囲気が伝わるお座敷が素敵。

[**松本市美術館**] 郷土ゆかりの作家の常設展示が魅力的 (特に草間彌生の作品が好き)。

[**Bunkamura**] ニューヨーク・グッケンハイム美術館展を見て、NY に行きたくなった。施設もよい。

[**松坂屋美術館**] クリムトの壁画《ベートーヴェン・フリーズ》は見ごたえがあった。

皆さんご協力ありがとうございました。　(湯田)

◎美術館サポート活動報告〔アンケート集計〕

ここでは、平成 16 年度から始まった美術館サポート活動を順にご紹介していきます。

今回は展覧会のアンケート集計です。メンバーは現在 6 名。これまでに「国吉康雄展」「熊谷守一展」「境界をこえて」などの集計をしました。活動場所は、美術館 11 階学芸員室奥の「友の会コーナー」が中心ですが、中には自宅で作業される方もあったそうです。アンケートは美術館が来館者の意見を知る数少ない重要な機会です。その橋渡し役となるアンケート集計もとても重要なサポートです。皆さんも展覧会のモニターになってアンケートにご記入ください。　(真野)

○愛知県美術館コレクションから―深く知ると、もっと見えてくる○

与謝蕪村２作品

重文 与謝蕪村《富嶽列松図》江戸時代

名古屋の著名な収集家、故木村定三氏ご本人ならびに美保子夫人から3,000点を超えるコレクションをご寄贈いただいたことはご存知のとおりです。このコレクションのなかで、一つの核をなすのが与謝蕪村や浦上玉堂の代表作を含む近世絵画群です。そこで今回は「自然をめぐる千年の旅」展にも出品される与謝蕪村の作品をご紹介しましょう。

蕪村(1716(享保元)年–1783(天明３)年)は、江戸時代中期を代表する文人で、絵画と俳諧の分野で活躍しました。このコレクションには、その蕪村の作品が８点(絵画７点、書１点)も含まれています。そのなかで《富嶽列松図》は、晩年の蕪村が到達した絵画表現を余すところなく伝える代表作です。墨の濃淡を自在に用いて空を描き、その塗り残しで白く雪化粧した富士山を浮かび上がらせるという大胆な手法は、蕪村の晩年に特徴的に見られるものです。そして手前には単純化したかたちで表された松をリズミカルに配して、日本の典型とも言える自然の情景を、極端な横長の画面に絶妙なニュアンスをたたえて描き出しています。

与謝蕪村《紫陽花にほととぎす図》江戸時代

また蕪村には「俳画」と呼ばれる、俳諧と絵画を融合させた独自の世界があることも忘れることができません。最晩年の制作になる《紫陽花にほととぎす図》はその俳画を代表する優品として知られているものです。画面には、紫陽花とホトトギスが余白をたっぷりととって描かれ、そこに「岩くらの狂女恋せよほととぎす」という句が書き込まれています。一見簡潔でさりげない表現ですが、そこには俳諧という文学と、その背景となる歴史を知らなければ味わうことのできない世界があります。「岩くら(岩倉)」とは京都の地名で、現在の京都市北部に位置しています。この地の大雲寺境内の滝は古くから精神病患者の治療に効能があるとされ、この地域はその療養地として知られていました。つまり「岩倉」という地は、人々に「物狂(ものぐるい)」を連想させるものでした。蕪村はそのことを念頭において、ホトトギスの鳴き声に、岩倉の狂女が恋人を慕って泣く声を重ねあわせて一つの句としたのです。その俳句の世界を、絵や書と融合させて総合的に表現したのがこの作品です。そうしてみると紫陽花も恋を連想させる花として和歌などにしばしば詠まれたもので、単に季節感を表すものではないようです。さりげない、しかし味わい尽きないのが蕪村の俳画なのです。　(美術課長 村田真宏)

○講座ダイジェスト○

愛知県美術館コレクション研究講座
レクチャー&トーク「現代作家 自作を語る」

愛知県美術館や友の会では定期的に美術講座を開催しています。その中の一部を、講師や聴講者に紹介していただくのがこのコーナーです。

今回は、愛知県美術館連続講座「愛知県美術館のコレクション研究」と「現代作家 自作を語る」シリーズから、3講座をご紹介します。

コレクション研究講座　第1回

グスタフ・クリムト

《人生は戦いなり（黄金の騎士）》

講師：栗田秀法氏（名古屋芸術大学助教授）

愛知県美術館の所蔵品を紹介する講座が始まるということで、元スタッフの小生にもお声がかかりました。今や県美のシンボル的な存在となったクリムト(1862-1918)の《人生は戦いなり(黄金の騎士)》(1903)を取り上げる今回のお話で、ささやかながらお世話になった美術館に御恩返しをすることができましたし、『研究紀要』1号に発表したことなどを振り返りながら久しぶりにこの作品についてじっくり考えてみる機会を与えられたことはたいへんうれしいことでした。

この《黄金の騎士》が愛知県美術館でも開催された「ウィーンのジャポニスム」展に出品されたことがありましたが、昨年秋に東京国立近代美術館で開かれた「琳派展」に出品されたことでクリムトと日本との関係に改めて関心が呼び起こされています。画面下端の帯には金屏風が意識されていることはいうまでもありませんが、今回のお話では背景に描かれたびっしりと画面を埋めつくす金と緑の効果が蒔絵や料紙装飾に通じるのではないかということをちょっぴり強調してみました。

ところで一般の美術ファンにとって、《人生は戦いなり》がクリムトのイメージからは程遠い作品なのも事実です。けれどもこの作品は制作当時の画家の芸術姿勢の変化を知る上で実に貴重な作品なのです。いささか単純化しすぎかもしれませんが、私はクリムトの生涯には3人のクリムトがいると考えています。皆さんになじみのクリムトは実は第3のクリムトです。第1のクリムトは1897年のウィーン分離派結成以前の、卓抜な描写技量で主に公共建築物の建築にたずさわった売れっ子画家のクリムトです。第2のクリムトは1897年から1905年までのクリムトで、ウィーン大学の大講堂天井画という晴れの舞台で新境地を示した画家が国会をも巻き込むスキャンダルに巻き込まれ、闘争と隠棲の狭間で揺れるクリムトです。後ろ盾となった文部大臣の支援のトーンも徐々に低下し、世間的な名声と芸術の自由が両立しないことがはっきりとしてきました。この論争の渦中にクリムトの画業を回顧する展覧会のために描かれたのが《人生は戦いなり》でした。題名が示すように批判に対抗する姿勢が明らかなのですが、闘争の舞台は楽園に設定され、後に大学の注文を撤回し、世間から離れて理解ある支援者のためだけに制作を続けるクリムトの姿勢が予示されているかのようです。20世紀美術の重要な側面のひとつが闘争であることを思い起こすとき、《騎士》が愛知県美術館の20世紀美術の系統的なコレクションの劈頭を飾るに実にふさわしい作品であることが理解していただけたことと思います。

（講師 栗田秀法）

コレクション研究講座　第２回

パウル・クレー《蛾の踊り》

講師：寺門臨太郎氏（筑波大学大学院講師）

俗に「絵解き」という。美術を研究しているから当然といえばそれまでだが、それにしても１枚の絵に隠れている謎を次から次へと解き明かしたものである。寺門さんの講演「クレー《蛾の踊り》」の第一印象である。そして企画展「20 世紀の美術・境界をこえて」のテーマにそってクレーの様々な越境が実証され、野次馬的関心でしか美術品に接していない当方も眩暈を感じた次第である。所蔵されている《女の館》を始め、クレーの作品は決して好きでなく、1993 年に開かれた企画展「パウルクレーの芸術」も見ていない。今にして後悔している。

《蛾の踊り》は第２次大戦下、和田定夫がドイツ人コレクター・ラルフスと現地で譲渡を契約し、戦後、和田の許に届いたという。ナチスに退廃芸術家と決めつけられたクレーの作品が枢軸国側の関係者の間を移転し、戦後、和田の許に届いた経緯は野次馬の興味をかき立てる。ドイツ語の「蛾」は「夜」と「蝶」を合成したものという。寺門さんの「時代と場という境界をこえて県美に所蔵された作品」の指摘に脈絡もなく、渡りをする蝶「アサギマダラ」と安西冬衛の「てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った」の一行詩を連想した。

（友の会会員 太田幸一）

「現代作家 自作を語る」シリーズ２

「現代の絵画について」

講師：辰野登恵子氏（画家）

愛知県美術館の所蔵作品《Untitled 95-1》の作家である画家の辰野登恵子さんのレクチャー＆トークが 12 月 18 日に行われました。前半のレクチャーでは、《Untitled 95-1》につながる過去の作品について話されました。かつてジャコメッティのごつごつした感じを意識して制作した《青と黄色シリーズ》のこと、行き詰まるとセザンヌの《水浴》に立ち帰ったことなどを話されました。空間意識を見せるための形を見つけるのに苦心され、大きな作品でも細い筆を使って細かいマチエールにこだわって制作されているそうです。主題として穴や空洞にもこだわり、色と形によってイリュージョンを追求されているとのことで、制作に対する思い入れが伝わってきました。その他、学部生時代は指導教官に野見山暁治氏を選んだこと、大学院では版画家になりたかった訳ではないが版画の要素を絵画に取り入れたいと思ったことや、駒井哲郎氏の勧めもあって同氏の教室を選んだことなど、ご自身の思い出話も聞くことができました。

後半は10階展示室に会場を移し、《Untitled 95-1》を前にして語っていただきました。久しぶりに自作と対面された辰野さんは、懐かしそうにしながらも、我ながらいい作品だと満足げでした。制作期間と完成の見極めについて尋ねられると、「この絵は大きい割りには早くて、３か月くらい。」「夜見たときはこれで完成と思っても、翌朝見ると気に入らないときがある。そんな時は描き足していって、これで間違いないなと思えば発表する。」「でもそれで失敗することも。そのままでいいのに、いじったせいでダメにする。どんな絵でも引き際が大事ですね。」……と、制作の裏話も聞けてちょっと得した気分になりました。

（森）

AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART

MEMBERSHIP

友の会マーク・発行物 一新

10周年を節目に理事会承認のもと今春から友の会マークが新しくなりました。ミュージアム・メンバーシップの「M」、愛知とアートの二つの「A」を組合せ、友の会が美術館を支える良きパートナーであることの願いが込められています。これに伴い、会員証、入会のご案内、会報など、友の会発行物も新しくなります。

友の会活動紹介

◀ジャズコンサート

芸文センター初の屋上コンサートとなり、100名あまりの参加者がジャスの調べと雰囲気を楽しみました。

会員限定講座▶

テーマ展作家の中澤英明氏に、「油絵のマチエール」と題して、油絵具の画材としての歴史も含めた専門的な話をお聞きしました。

◀特別鑑賞会

「境界をこえて」展では、特別に許可を頂き、展示作品に乗る体験ができました。学芸員同士のディスカッションも間近で拝見し、興味深い鑑賞会でした。

事務局だより

友の会は美術館の企画展を応援するために、平成15年度までは会費から企画展ごとに支援金を出してきました。しかし、今年度からはもっと形の見える支援をということで、ステッカー作戦やオアシス21からの連絡通路入口のバナー(垂れ幕)の設置など美術館の広報活動に、より積極的な協力をしてきました。そんな中、サポート活動のアンケート集計で、来館理由のひとつとして“ステッカーを見て”とか“オアシス21の垂れ幕を見て”の項目に○印を見つけたときは感激しました。美術館支援事業の大きな柱ともいえる展覧会広報は、マスコミ共催の組まれない展覧会において、その威力を発揮することを確信しました。さらに会員の皆様の口コミの力が今まで以上に発揮されれば、きっと美術館を元気にします。これからも更なるご協力をお願いします。

お知らせ

○友の会では「自然をめぐる千年の旅」展開催中に、日本伝統芸能である狂言の鑑賞会を開催します。名古屋を本拠として活躍される野村又三郎氏・小三郎氏をお招きする予定です。日程など決まり次第、書面にてお知らせします。

○友の会ホームページが、今年1月会員の手により生まれ変わりました。内容を充実させよりタイムリーにお届けします。美術館ホームページからリンクされています。是非アクセスしてください。

平成17年度前半企画展のご案内

自然をめぐる千年の旅 ―山水から風景へ―
3月11日(金) → 5月8日(日)

アジアの潜在力 ―海と島が育んだ美術―
5月24日(火) → 7月10日(日)

ゴッホ展 ―孤高の画家の原風景―
7月26日(火) → 9月25日(日)

19号答えてうれしい！プレゼントクイズ 正解は 第1問：C 第2問：C 第3問：B 第4問：A 第5問：B 第6問：A でした

編集後記

今回より会報をリニューアルしました。記事内容としては、友の会活動や会員の皆さんの声、美術館コレクションの紹介を大きく取り上げていく予定です。全面カラーで写真を増やし、デザインにも力を入れました。読んでも見ても楽しんでいただけたら嬉しいです。

会報とともに新しくなったマークは「じっとこちらを見つめる女の子」にも見え、その眼差しに応えられる友の会となるようお手伝いできればと思います。イベントにサポートに精力的に活動する友の会や会員の皆さんと共に、編集部もパワーアップしていきます。ご期待ください。 (水野)

□編集 水野 愛子／真野 良子／森 健次／伊奈 由希子
湯田 文／平松 章子／折戸 祥子／中田 賢
□協力 愛知県美術館企画普及課
□発行 2005年2月
愛知県美術館友の会
〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13-2
愛知芸術文化センター内
TEL：052-971-5511（代）内線347
FAX：052-971-5604
E-mail：tomonokai@aac.pref.aichi.jp
美術館HP：http://www-art.aac.pref.aichi.jp

Art Direction : Masaru NAKADA Design & Layout : Yukiko INA / Tomomasa NARITA